

主の日の意義について

はじめに

高松教区では、今年は聖体の年と位置づけて、聖体とミサについて集中的に理解する努力を続けております。それは高松教区が今求めている「教区の一致」と深く結びついています。ミサこそ教会の一致の源泉だからです。どのように教会共同体をつくるかということは、ミサをどのように生きるか、活かすかということと深くかわっています。特に主日のミサこそ教会生活の中心であり、頂点であることをこの際しっかりと認識することとしましょう。

一 ともに歩む教会にとって最重要事は「主の日」の集まりをどのように活かすかということである。

このことについては第一部でかなり述べていますので、繰り返す必要がありません。歴代の教皇は第二バチカン公会議の指針に沿って、主の日の大切さを口すっぱく主張しています。最近では、ヨハネ・パウロ二世は「主の日―日曜日の重要性」（一九九八年）という使徒的書簡でその大切さを強調しました。バチカン公会議は「主の日に信者は一つに集まらなければならぬ」と述べています。

それではどうして主の日を大切にすることがあるのでしょうか。神様は万物を創造されて最後に休まれ

ました。人も一週間の働きを終えて、神の創造の業に与ることができたことを感謝して休むのです。一週間を振り返ってみる良い時が日曜日です。ただでも忙しい現代社会にあつて、一週に一度ゆつくりと休む時間があるというのはすばらしいことです。それでもできないという方々も多いことでしょう。それでもその日を持つことで、より豊かな人間としての生き方、人との交わりに開かれるという考え方には賛同頂けると信じております。

それではどうして「主の日に集まる」理由があるのでしょう。一週間を振り返るためなら家に残つてゆつたりとした時間を過ごした方が良いでしょう。ところが教会は日曜日には教会に集まつて一緒に祝いをするようにと勧めます。日曜日は週の終わりの日でもあります。教会にとつては週の始まりの日でもあるから

です。「主の日」と呼ぶのは、その日こそ主が復活されて弟子たちに現われたことを思い起こす日だからです。主の復活をお祝いする日と呼んだ方が良いでしょう。お祝いですので、その日には喜びが溢れています。昔は日曜日のミサには信者は着飾つて来たものでした。それはお祝いを表すためでした。

お祝いには常に歌や踊り、食事があります。人との交わりがそこにはあり、喜びを共有します。日曜日のミサは洗礼を受けた人々がそこに集うことで喜びを表現します。一緒になつて弟子たちがした主の復活の体験をするために集まってくるのです。ヨハネ・パウロ二世はこれを「教会の日」とも呼んで、「教会がどのようなものであるかを明らかにするために集まることが大切です」と述べています。日曜日ミ

サに来る度ごとに教会を体験するのです。ですから、日曜日のミサを大切にする理由が見えてきます。義務だからとか、自分一人の慰め、または仲間と会うために主日のミサに参加するものではありません。

二 教会生活の中心は日曜日のミサである。

カトリック教会のカテキズムは「日曜日に行われる感謝の祭儀は教会生活の中心である」（カテキズム2177）と説いています。また「主において一つになる、これが明らかにするには、共同体全体が主の復活を記念するために集まる日においてです」（主の日32）とも述べられています。更に「感謝の祭儀は他のどんな宗教的な体験にも比べることはできません」と言われている通りです。

日曜日に教会に集まるということは大切です。例え司祭不在でミサがないとしても教会に信者は集まり、集会祭儀を行い、神に感謝と祈りを捧げるのです。その集会において兄弟としての交わりを深くするのです。ミサがないから主日に集まる理由がないというのは理にあっていません。キリシタン時代では司祭は不在でしたが、信者たちは日曜日に集まって集会祭儀をしていました。それによって司祭不在の三〇〇年間も信仰を保つことができました。

しかし、それでも主の日において何よりも大きな意義を持つのは、ともにミサを捧げることができることです。ミサにあずかるという表現より、現代は“ともにささげるミサ”という表現を使います。それには大きな意義があります。初代教会では「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること

に熱心であった」（使徒行伝 2、42）といわれている通

り、何よりも「心を一つにして」パンを裂く式に与りました。これを通して初代教会の中では信者間に兄弟愛が深まりました。日曜日に集まることで信者は教会を体験します。「おのおの共同体は、パンを裂くためにそのメンバー全員が集まるとき、教会の秘義が具体的に表現される場となります」（主の日 34）。ともに捧げるミサで世界に広がる教会、人類のために祈ります。世界の苦悩を思い起こし、そのために犠牲を捧げます。そしてそれによって、何よりも教会の中での一致が生まれます。それは主キリストに結ばれた真の一致となるからです。単なる友情とか、身内の愛情によるものではない、信仰における一致です。

三 司牧上も主日のミサの意義を明らかにする必要があります

る。

「小教区の共同体意識が盛んになるように、とくに主日のミサの共同体的祭儀において努力しなければならぬ」（典礼憲章 42）とバチカン公会議は教えています。何よりも主日のミサを大切にするという意味です。そのためには種々のグループがあり、種々の修道院があつたとしても、まず小教区のミサを優先させるというのが教会の考え方です（聖体祭儀指針 26）。「このようなわけで集会の日である日曜日には小グループのミサは勧められるべきではありません。これは小教区の集会に必要な司祭の役務が奪われてしまうという問題だけでなく、教会共同体のいのちと一致が十全に守られ、奨励されるようにすることの問題でもあります」（特別なグループのための

ミサの指針10)。以上の教会の考え方を考慮したうえで、高松教区においては次の指針を私は提案します。

1 小教区共同体の一致を促進するために、何よりも主日のミサを優先させる。

高松教区においても多くのグループがあります。しかし、それらのグループは小教区の一致を促進するためにあるものです。そのために心がけて小教区の主日のミサを大切にすることを決意しましょう。

2 小教区共同体を感じさせる工夫を主日のミサに実現させる。

高松教区には小さな小教区がたくさんあります。それだけに家庭的な良い雰囲気をつくりだすことが可能です。どのようにすればより家庭的で、より信仰が高まるミサがあり得るか、各小教区は工夫し

てみる価値があります。朗読、説教、聖歌、挙式の動作などたくさん工夫してみてください。

3 主日の主要なミサを大事にする。

高松教区のような小さな教区ではミサの数を多く増やす必要はありません。むしろ小教区の一致をよく表わす主要なミサに力を注ぐことが大切です。信者もそのミサに極力参加し、そのミサを盛り上げる努力をしなければなりません。

4 主日の主要なミサとともに捧げることができない信徒のために土曜日、または他の週日にミサを配慮することができます。

全ての信徒が日曜日のミサに参加できるものではありません。彼らのために小教区の責任者は日曜日の前日、あるいは必要だと判断すれば週日にもそれに替わるミサを考えることができます

ます。参加できない人たちのための教会の配慮です。しかし、それは司牧的配慮であって、決してそのために主日の主要なミサをないがしろにするものとなつてはなりません。その配慮は司牧者の賢明な判断にかかっています。

グループのためのミサは司牧責任者の指示に従わなければならない。

高松教区においても種々のグループがあります。青年のためとか、子供のためとか、外国人のためのミサとか、カテゴリー別のミサも考えられます。これらは全て小教区の責任者の指導の下に行わなければならないません。グループためのミサがあつたとしても、それは決して主日の主要なミサをないがしろにするものであつてはなりません。むしろ、主日の主要なミサになるべく参加する方向で考えるよう

にグループの指導者は考えてください。協力宣教司牧を推進している現在、グループのミサについては個々に責任者と話し合わないといけません。協力宣教司牧では、責任者は小教区の司祭と小教区評議會を指しています。

典礼は司教の権限の下にあり、種々の試みは促進されるべきですが、司教の許可を必要としている。

典礼は一致のためにとっても大事な要因です。典礼の一致は教会の一致でもあります。この点に関して現在ローマは厳しい線を出していますし、日本司教団もこの点に関して厳しい線を守っています。高松教区でもこの点においては日本司教団の決定に則って行います。種々の典礼の試みは勧められますが、それを行うにあたつ

て必ず教区司教に相談することを勧めます。

おわりに

日曜日毎に集まり、共に祈り、感謝の祭儀を捧げることを繰り返すことで教会意識が深まって参ります。その集會に神様が働いて下さり、そこに参加している人々に素晴らしい恵みがあたえられます。大切なのは「繰り返し参加する」(主の日81)ことです。全ての信者が主

の日の集會に心から参加することで教会が生まれます。ミサは日常の生活の煩わしさより逃れるためにあるものでもないし、うっとりとするような宗教的なエクスタジーを味わうためでもありません。仲間たちの愛を確かめるサロンのようなものでもありません。キリストを中心とした、全人類のために自分を捧げる行為としてとも

にミサを生きるのです。日曜日のミサを活かすためにどのようなすれば良いかこれを機会に真剣に考えるようにしましょう。ある方々はミサの意味を深く理解しているし、また真剣にそれを生活に活かす工夫をしています。またある方々は、素晴らしいミサをはや体験しています。いずれの方々も、それを自分のためにだけにするのではなくて、全ての信徒のためにそれを活かす工夫をして下さるようお願いします。

二〇〇六年十二月三日

待降節第一主日

高松教区司教

溝部 脩